

まぼろしの

## 南摩綱紀撰「泊翁西村先生碑銘」を探る

五十嵐 金二郎

故人の履歴は、その人の最も身近にあつて信頼のおける人が書いた墓碑銘にたよるのが比較的的信憑性が高い。流布しているいくつかの人名事典をみ、また様々な資料や学者の書いた諸論文でその人の事蹟を探る手法も一つの方法に違いない。しかし、いずれにしても「碑銘」の存在を無視することはできない。

これは筆者の一つの態度である。近年拓本の道具を背負いながら碑銘の採拓に歩く所以である。

ところで当館では、個人文庫展を昭和五十七年からこれまで三回にわたつて開催して来た。これからのべる西村茂樹の碑銘の所在については、昭和五十七年秋第一回の——西洋学術の追求——展における目録作成の過程で自ずと生じた疑問であった。そこで担当者と相計り、許す限り探ってみようとしたのである。本稿はその経緯をあるがままに書きしるしたものである。

る。一つの事実を記録しておくことに多少の意義を感じたからである。

「西村茂樹」の場合、その碑銘なるものが全集にも諸論文の中にも全く掲載されていない事を知り、少なくとも西村茂樹ほどの人が碑銘一つないというのはどうもおかしい、という素朴な疑問をもった。

そこで調べてみると、「佐倉市誌資料」第二輯（昭和三十四年三月 佐倉市公民館刊 謄写版）の所在を知った。

早速同誌をみると、「金石文」の分類の中に、所在を「東京」として、「西村茂樹碑銘」の項目をもうけ、簡単な茂樹の略伝を書きつづつた後に、「泊翁西村先生碑銘」と題し、最後に「明治三十七年七月／弘道会副会長従四位勳四等南摩綱紀撰」と結んでいる。碑文としては大変な長文で、字数にしておよそ二、四五

○字にわたるものである。とつきにこの長文を刻んだ碑の雄大なる姿を思い浮べた。「よし／＼拓本を採ろう」と担当者と話し合った。速決した。「ところでこの碑はどこにあるのかネ?」、問題の発端はここから始まった。

すでに解説などでご承知のように、西村茂樹の菩提寺は、東京・文京区千駄木五丁目の養源寺で、墓標は東京都の史蹟に指定されている。「碑」も当然同寺に建立されているであろうことは疑う余地はない。「佐倉市誌資料」でも所在を「東京」としていることであるから他にあるとは考えられない。

早速養源寺に電話をし「碑」の所在を確認した。すると意外にも墓はありますがそのような「碑」は建っておりません、という。「佐倉市誌資料」にこういう碑文がのっていること、しかもその所在として「東京」になっていることなど、二三のやりとりがあったが、住職は、先代が亡くなって跡をついでまだ日が浅いことなどもあって、「探しておきましょう」という返事で結んだ。

養源寺には建っていないという。それでは「碑文」を載せた佐倉市誌編集室で知っているのではと、それから早速電話連絡をとる。「碑文の出典は?」と問う、返事は不明である。「碑のありかは?」「東京」とあるのみであるという。昭和三十四年佐倉公民館時代、台湾で教鞭をとっておられた平田先生が定年で退職され、出身地佐倉に帰られ市史の編纂に当たられた。先生は非常に几帳面な仕事をなさる方ですから直接「碑」から拓本を採られて解説されたものと思います。先生は今も故人になられたがさいわい当時の記録や拓本類は今日佐倉市に引き継がれ

ている、それらを探がせば出典がわかるかも知れない、と一縷の望みを含んだ返事である。

一方本家本元西村の起こした弘道会に連絡、だが返事は「そんなものがあるのですか?、探してみましよう」という返事で愕然。だが諦め切れず今度は東京都の文化財担当者に連絡をとる。初め「墓のことは史蹟に指定されているのでわかりませんが、碑のことは弘道会に聞いて下さい」という。「弘道会ではわからないので、或は墓の指定のこともあるのでそちらでわかるのではないかと思ひまして」と更に促すと、直接担当の段木氏が出られ、「碑」は養源寺本堂の裏に建っていた、という。

昭和四十三年都の史蹟として墓標を指定したとき解説を建てに行き、その時に、弘道会の渡辺氏（先代事務長）と、先代の住職と私の三人で碑を見、西村のものだと思ったので写真を一枚撮った記憶がある、という段木氏の話しである。

この証言を種に養源寺に再び連絡をとると奥様が出られ、「そういわれてみるとあれがそうかなア、確かにあります」という返事をもらう、そして採拓の許可をも得る。歓喜がどっとわく。早速その旨を弘道会に知らせ、現地養源寺に直接西村文庫担当者である貴重書室の井坂君が「碑」の下見に赴く、久しぶりの酷暑の午後であった。ところがそれも嫌喜びで矢張り「碑」は存在しなかつたのである。彼は帰るなりがっくり力をおとして椅子に座った。なおさら疑問がつのるばかりだ。しからば「佐倉市誌資料」に掲載されている「碑文」は何なのであるうか、果して出典は?。

一方これらと並行して、弘道会の機関誌「弘道」を西村茂樹

の没年である明治三十五年以降から『佐倉市誌資料』第二輯の刊行年次である昭和三十四年まで、南摩綱紀撰文の西村茂樹の碑文を、同室の富士原さんの手をも借りて探しつづけた。しかし、碑文のことについては一言半句もでてこない。益々疑問はますますかきだ。『弘道』にもまた南摩氏の詩文集『環碧楼遺稿』（自筆稿本）にも載っていない碑文がどうしてあるのであろうか。南摩氏は三十年來西村茂樹と一緒に行動を共にし、自らも茂樹の薫陶を得たといっている最も信頼性の高い人の撰文ではないのか、しかも「碑銘」の中で「頃日弘道會員相謀將建碑不朽先生學德功績、使余作銘余受先生薫陶三十年、不可以不文而辭、乃挾家譜及土屋伯毅所著傳、更加余所知為序」と碑文を書く因由もちやんと述べているではないか、どうしても納得できない。更に探索はつづく。

西村の晩年の二十年は、墨田区向島に住み、そこを根城にして「国民的道徳論」をかかげて全国を遊説し、ついにそこで没して、墨田区は西村とは因縁の深い旧地である。そこで、『墨田区史』を繙いた上で同区史編纂室に連絡、重ねて養源寺のある文京区に住む知人の郷土史家渡辺得治郎氏に尋ね、そして、初代の都文化財調査担当であった稲村坦元翁から、息男徹元氏を通じて聞き、重ねて現都文化財担当の段木氏より二代目担当の金山正好氏の紹介を受け、件のことを質問したが、「碑」の正体は一向にわからない。

筆者もいよいよ足で探すほかないと考え、二度養源寺に身を運んだ。奥さまに会い、お抱えの墓石工氏に会い、三十年來三代にわたって墓所の守をしているご婦人に会い、そして西村家

の菩提寺である本郷の麟祥寺（春日の局の菩提寺）の住職にもおめにかかった。しかし、いずれも「碑」の建ったこと、またその所在を証言して下さった人は一人もいなかった。ただ現都文化財調査担当の段木氏のみその可能性をのぞかせた発言があったが、氏の記憶も時の立つにつれ曖昧なものであることが判明してきた。それだけにどうしても諦め切れないまま、養源寺、都文化財調査担当の段木氏、佐倉市誌編纂室の青柳氏、弘道会の渡辺事務局長、墨田区史編纂室の奈良氏ら、多角形の線をつなぐ西村茂樹の「碑文」という点の正体を明かそうとして何回となく往復を重ねてきた。そして今日の時点で一応の結論を得た。

- 一、碑は建たなかったのではないか<sup>(注一)</sup>
- 二、もしそうならば『佐倉市誌資料』に載った南摩綱紀撰の「泊翁西村先生碑銘」の出典如何<sup>(注二)</sup>

疑問は何ら氷解することなく今日に至っている。そこでこの碑文については西村茂樹の研究者にとっても全く知られていない今日において、ぜひ全文を転載し広く世に紹介することによって、或は思いがけぬところから疑問を解く鍵を与えて下さる方もあらうと考え、佐倉市誌編纂室の青柳氏のご理解を得て掲載させていただくことにした。以上の経緯をご理解の上大方のご教示を得られれば幸である。

注一 これまでの調査もさることながら、筆者の経験によれば「碑銘」には、

撰者名・篆額者名・撰文の筆者名・刻工名等が記録されるのが一般であるが、この碑文には撰者名しか記されていない。いわば「碑銘」の

態をなしていないという観点からも、撰文のみで終り碑は建たなかったのではないかと推測される。

注二 南摩綱紀(一八三—一九〇九)は明治時代の教育家、文政六年十一月会津藩士綱雅の子として若松に生れる。字は士張、号は羽峰。藩学日新館に入り、二十五歳に藩命を受けて江戸に出昌平養に修めること八年、ついで杉田成卿、石井密太郎に洋学を学ぶ。安政二年(一八五五)藩命により関西諸州を歴遊風俗を探り『負笈管見録』を著わして

献上、文久二年(一八六二)樺太島戍衛を拜命、代官となり、在島六年島人を撫育教化し、慶応三年(一八六七)藩邸の学職となる。慶応四年(一八六八)正月鳥羽伏見の役に大阪にありひそかに形勢を探り帰藩、隣藩の間を往来したが会津城陥落に及び高田藩に幽閉、翌年赦免、間もなく淀藩に招かれ、ついで京都府学職につき、以後太政官、文部省を経、東京大学、高等師範学校等の教授を歴任した。和漢洋の歴史学に通じ、詩文に長じ、能書家としても知られた。公職の傍ら初代日本弘道会副会長として西村茂樹と共に活躍、斯文学会講師、明治三十六・七年(一九〇三、四)宮中御講書始に、進講の榮を担う。明治四十二年(一九〇九)四月十三日正四位に叙したが、同日歿した。年八十七。著書に『内国史略』『追遠録』『環碧楼遺稿』などがある。墓地は谷中甲種甲第一号七側にある。

泊翁西村先生碑銘

学問 博、德行純篤、可為萬世師表者、泊翁先生是也、先生幼名平太郎、後改鼎又茂樹、泊翁其号、姓源氏、系出自新羅三郎義光、後裔長泰始西村、其五世孫元治仕蒲生氏卿、有戰功、後三世行芳仕佐倉藩堀田侯、子孫世襲、考芳郁為人剛毅、材兼

文武、長經濟、有政績、妣荒井氏、先生以文政十一年三月十三日生于江戸、幼入藩学温故堂、修文武業、年十六作藤原基經論、安井息軒、大稱之、既而從大塚同庵、学西洋砲術、窮蘊奧、又就佐久間象山、学西洋兵法、象山曰、砲術不如兵法、兵法不如洋学、先生深服其說、自此大盡力於西籍、嘉永三年、先生承家為支藩佐野侯、堀田正徳君伝、時正徳君惑好臣、藩士不服、先生極諫、君悔悟黜之、一藩帖然、六年六月、米国軍艦來浦賀、乞互市、先生具意見上之藩主、又著海防策、上之阿部閣老、綏々数千言、皆合機宜、當此時、開港攘夷二說紛起、先生常持開港說、而時論以攘夷說為正義、先生嘆曰、是因不知海外形勢耳、乃上書幕府、欲遊学海外伝習其長技以警醒、世人、閣老不可、安政元年十月、佐野侯正衛君卒、孫正頌君承後、年甫十三、先生受遺託、整理藩政、或嘲之曰、牛刀割鷄、先生曰、獅子搏兔、亦用全力、二年、藩主正睦君為閣老、專管外國事、先生掌機密文書、二年、藩主正睦君為閣老、專管外國事、先生掌機密文書、慶応三年十月、上書徳川慶喜公、切論時事、尋為徳川氏畫三策、是月以藩命至京師、遂封大阪、明治元年一月三日、聞徳川氏出兵向京師、走出望淀川、兵船陸續擲尾而沓、夜遙望東方火光燭天、且是既交戰也、但火光聚一所而不移、呼嗟東軍敗矣、翌日敗報果至、先生謂歸路必塞、乃踰暗嶺、船琵琶湖、至堅田佐野藩別邑也、因留探京師動靜、且上書岩倉輔相、勸弭兵、不省、尋歸東京、二年任佐倉藩大參事、四年三月上書欲開鑿印橋沼、計已成、聞廢藩議起、不果、更讓士族授産法、大檢封邑、得荒地七百餘町、分文士族一千二百餘戶、每戶得五段餘步、乃懇拓草萊、栽培茶樹、年得茶葉數千貫、販之海外、得巨利以資生産、

八月、為兵部省所辭、辭而不出、十一月、任印旛縣權參事、固辭、不允、五年三月以病辭、五月、開家塾於東京、深川、授生徒、傍事著述、六月有感於時事、欲興貴族院、與木戶參議、山田少將及毛利、池田、細川越前等諸華族謀、遂不成、八月、與森有禮等謀、擬明六社、即今學士會院也、是為本邦學會之始、十一月、補文部省五等出仕、八年、進四等出仕、兼三等侍講、叙從五位、爾來啓沃、天皇、皇后兩陛下、其功居多焉、九年、任文部大丞、三月擬修身學社、初太政官之頒布學制也、先生讀至學問所以立身治生興產、曰、論則善矣、但未說及仁義忠孝之教、恐後世不堪其弊、當時學者皆眩惑西洋學術、以道義為迂腐、先生慨嘆曰、儒道漸廢、修身之學失其根柢、人心放逸、將無所底止、因欲獨力維持國民道德、是所以擬此社也、後改稱日本弘道會、十年一月、仕文部大書記官、十二年三月為東京學士會員、十五年六月、叙勳四等、賜旭日小綬章、十七年十月、補宮內省三等出仕、為文學御用掛、兼文部省編輯局長、乃舉當時學者、編纂須要書十餘種、如古事類苑最浩澣、未告成、十八年四月、叙勳三等、賜旭日中綬章、十二年、朝廷釐革大政、法律制度禮儀風俗、一倣泰西、古來所傳忠孝節義勇武廉恥、如棄而不顧者、先生憂憤、聚眾於大學、講說連三日、大警揚人心、後印行之、日本道德論是也、十九年、任宮中顧問官、叙從四位勅任二等、罷文部省兼勳、二十一年七月、兼任華族女學校長、乃欲參酌本邦古代典令、興歐米諸國學規、改定其教則、未果罷職、二十二年、賜憲法發布紀念章、先是先生拜明宮輔導命又應有栖川、東伏見、北白川、伏見四親王聘、講西洋史、大見信任、先生常謂、西洋諸國以耶穌教涵養國民道德、本邦道德之教、宜以、

皇室為基礎、如其智體育付之文部省而可、以此語同僚及宮內大臣、皆善之、乃告之文部大臣、大臣誤解、事遂不成、二十二年、難議請設明倫院於宮內省中、亦不行、二十三年九月、為貴族院議員、後二年、以議不合辭之、後又上書諸大臣、痛論國事、前後所建白數十通、皆極切時勢、二十六年、叙勳二等、賜瑞寶章、三十三年進一等官、叙從三位、以年老辭職、聖上賜菊花章七宝燒花瓶一雙、皇后宮手賜菊花章三套銀盃及金二百圓、三十四年授文學博士学位、三十五年三月、罹病、療於赤十字病院、不愈、八月十五日、大漸、兩陛下賜鮮魚及葡萄酒、東宮賜餚、十六日、特旨叙正三位勳一等、授瑞寶章、舊藩主堀田正倫君、自鎌倉特帰、臨褥問病、十八日遂薨壽七十七又五、兩陛下賜祭菜金五百圓、東宮賜金五拾圓、二十二日、葬東京本郷区駒籠養源寺、會葬者一千餘人、先生軀幹豐偉、容溫言厲、喜怒不見色、深究和漢洋之學、融合其說、斟酌時勢、侃々讜讜、致力國家、知無不言、言無不盡、其意在振興國民道德確立萬世基礎、其自修、言行相顧、一動一靜、皆為世楷範、所謂可為萬世師表者非邪、先生之在文部省也、周遊海外、獎勵學事、後又歷遊各地、諄々說道德、士民信服今也弘道會員殆一萬人、支會至一百三十餘之多、先生所著書、萬國史略、西國紀原、婦女鑑、小学修身訓、初學寶訓、心學講義、日本道德論、讀書次第、泊翁危言、住事錄、建言稿、記憶錄、自識錄、其他所譯述、防海要論、經濟要旨、教育史、西史年表、泰西史鑑、洛日克入門、凡一百餘冊、其未全者、言論叢及隨筆若干卷、配佐倉藩鈴木光尚女、生五男三女、男一別成家一冑他氏、女二共嫁入、三男一

された。八一〇年計画で目録の編さん、資料のマイクロ化が進められ、利用案内の作成、閲覧室の拡大なども課題となっている。

\*「国立国会図書館月報」二五八号（一九八二年）、二七六号（一九八四年）主要参考資料

○赤子「我国檔案館概述」歴史檔案 一九八二年三期

○陳恭祿「中国近代史資料概述」一九八二年 中華書局

○趙越「中国歴史檔案沿革初探」遼寧大学学报 一九八三年四期

○「中華人民共和国法規彙編」一九五六年—六月、一九五七年七月—十二月

○「中国檔案学会成立」歴史檔案 一九八二年一期

○「全国檔案工作会議在北京召開」歴史檔案 一九八三年二期

○「歴史学年鑑」一九七九、一九八一年 檔案館の項

○「史学情報」一九八二、一九八三年各期 檔案館の項

○「中国百科年鑑」一九八二、一九八三年、一九八四年 檔案館の項

○劉子揚「故宮明清檔案概論」清史論叢 一集 一九七九年

○朱金甫「故宮明清檔案部所藏檔案的過去和現在」清代檔案史料叢編 三輯 一九七九年

○李鵬年「故宮明清檔案部所存主要檔案述略」清代檔案史料叢編 三輯 一九七九年

○李鵬年「内閣大庫—清代最重要的檔案庫」故宮博物院院刊 一九八〇年二期

○神田信夫「中国第一歴史檔案館訪問記」東方学 六一輯 一九八一年

○単士魁「中国第一歴史檔案館」歴史檔案 一九八一年一期

○「中国第一歴史檔案館所藏檔案編輯出版情況一覽表」歴史檔案 一九八二年二期

○「中国第一歴史檔案館一九八三年檔案史料編訳工作綜述」歴史檔案 一九八三年二期

○鞠徳源「明清檔案管理走向現代化」光明日報 一九八四年九月一七日

○陳典唐「中国第二歴史檔案館」歴史檔案 一九八一年二期

○施宣岑「関于〈中華民國史〉檔案史料的收集和整理」歴史檔案 一九八三年二期

○慶軒「台湾所藏民国檔案」歴史檔案 一九八四年二期

○「中国現代史研究資料・文献紹介(3)刊行された檔案資料」中国研究月報 一九八四年一〇月

○「中国第二歴史檔案館愿意向台湾学者開放」人民日報 一九八四年四月一日

(なかはら・ますえ アジア・アフリカ課)

(三二)ページより続く)

女天、孫龍太郎承家、頃日弘道會員相謀將建碑不朽先生学徳功績、使余作銘余受先生薰陶三十年、不可以不文而辭、乃據其家譜及土屋伯毅所著伝、更加余所知為序、係銘曰、

道出於天 弘之在人 世迷私利 多失本原 偉矣先生 雙手廻瀾 夙修厥徳 乃哲乃賢 弘道創会 誘導国民 和漢洋学 研究深淵 著書充棟 闡明彝倫 死而不死 遺徳千年  
明治三十七年七月

弘道会副会長從四位勳四等南摩綱紀撰

(いがらし・きんざぶろう 人文課)